九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

佐藤直方の学問と思想に関する研究

関，幹雄

https://hdl.handle.net/2324/1931667

出版情報：九州大学，2017，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：関　幹雄

論 文 名　：佐藤直方の学問と思想に関する研究

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、江戸時代の儒学者で、山崎闇斎（1619 年―1682 年）の高弟であった佐藤直方（1650 年―1719 年）の思想と学問に関して、理気論・人性論・学問論・名分論にわたってその言説を再検討することにより、直方の思想構造の全体像を解明しようとしたものである。

本論文は、序論・本論・結論により構成されており、五章からなる本論における検討を通して、その哲学思想の全体像を結論として提出することを目的とする。

序論では、佐藤直方に関する先行研究と研究史を整理し、本論文の目的と構成について言及した。先行研究の方向性を確認するとともに、直方の言説の特性と、それに起因する直方研究の問題点を提示した上で、本論文の目的を明らかにしている。

第一章「理気論に対する視点」では、「太極」に対する先人の注釈を直方が如何に把握していたのかという点について通時的に検討することにより、直方の想定していた理気論の構造を解明した。また、異端の理気論理解を偏説と看做していた点を指摘し、第三節においてその異端批判の言説について検討を加えることにより、その議論の構図を確認するとともに、背景にある理気論理解を解明した。

第二章「仁に対する視点」では、まず北宋の儒学者張載が著わした『西銘』に対する闇斎学派の講究態度を検討し、闇斎学派の学風とも言われている「体認」という理解態度の形成について解明した。第二節・第三節では、体認により理解された仁を如何に定義していたのかという点について、闇斎の仁の定義とも比較しつつ、直方の仁理解の構造を解明した。

第三章「智に対する視点」では、第二章の仁についての理解とも関連する、智に対する直方の理解構造について検討する。闇斎学派において重要視されていた「智蔵説」と

いう徳性理解について、第一節は朱子と闇斎、第二節は闇斎学派の言説を検討することで、その展開を確認した。第三節においては、直方の「智蔵説」理解について検討し、直方においては、智蔵の概念と敬・主静とが一体的に把握されていたことを解明した。また、前章で検討した仁に対する視点との連関にも言及して整理を行った。

第四章「学問と著述に対する視点」では、まず『大学』解釈に関する諸問題を検討して直方の学問論を考察した。闇斎以降、内外・心身の概念が『大学』を解釈する際に強く意識されていたが、この闇斎の解釈を強く意識していたと考えられる直方の『大学』解釈の立場について検討を加えた。また第二節では、自身の学問を開示するための著述について、その著作態度を考察した。闇斎学派においては、膨大な数の写本資料が散在し重要な研究資源となっているが、先人の著作の抄録である「抄出書」についても、直方の講学活動のなかで重要な役割を果たしていたと考えられる。ここでは、直方が抄出書に込めた緻密な構成の意図を分析し、その背景にある学問観を明らかにした。

第五章「名分論に対する視点」では、「湯武放伐論」・「中国論」・「人物評価」という各議論をめぐって、そこでなされた言説の意図と背景にある思想構造とを検討した。闇斎学派においてそれらの各論が紛々たる様相を呈していたのは、気の位相に偏執する立場で視野狭窄に陥った判断が下されているためだと直方は捉えていた。そのような問題意識のもとに発せられた直方の言説は、理気の位相から理の位相へという視座をもって偏説に立ち向かっていくという性質のものであったということを解明した。

結論では、「本論文の要旨」として、各論において看取された思想構造を改めて整理し、それにより解明された哲学思想の全体像を「直方の思想」として提示した。極端な言説が散見し、偏説をなしたと定義されることが多かった直方の思想ではあるが、かえって理気相即の視点を立脚点として事態に応じる姿勢を持つものであったことが明らかになり、それゆえ自身の言説は公論に立脚し一貫性を有したものとして自覚されていたということを論じて結論とした。